特集

救急医療の現状

救える命を守るために

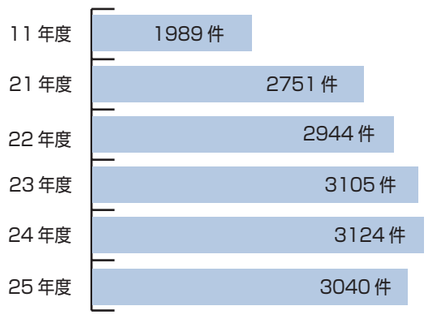
高齢化の進展に伴い、救急車の出動件数は年々増加しています。
中には、救急車の利用が必要ないのではと思われる事例があるのも事実。
あなたの大切な人が倒れたとき、救急車が全て出動していて
救えるはずの命が救えない、ということも起こりえます。
限りある救急医療を、これからも維持していくために。
今月号では、救急医療について学びます

増え続ける救急出動

急病や事故など、命に関わる緊急事態に備えて消防署と救急医療機関では、24時間体制で待機しています。また、平成24年から導入されたドクターヘリなど救急医療体制は日々整備が進んでいます。

そのような中、問題となっているのは救急車の出動件数の増加です。西諸地区では平成25年度は3040件で、平成11年度と比べると1000件以上増えています（表1参照）。そのため、出動時間が重なり現場到着が遅れる事例も。さらに増加すると機材・人員が不足し対応できないことも懸念されます。

表1）西諸地区の年度別の救急出動件数



高齢化で搬送件数増える

平成25年度は、全搬送人数2815人のうち1754人は65歳以上の高齢者（表2参照）でした。これは、全体の約62パーセント。小林の全人口の65歳以上の割合が、31・8パーセント（平成26年8月1日現在）であることを考えると、その高さが分かります。

今後、高齢化が進むことから、搬送件数が増えていくことは避けられません。

表2）年齢区分別搬送人数

年　齢	人　数
新生児28日まで	8人
29日～6歳	90人
7～17歳	84人
18～64歳	879人
65歳以上	1754人

重症者への対応が遅れる

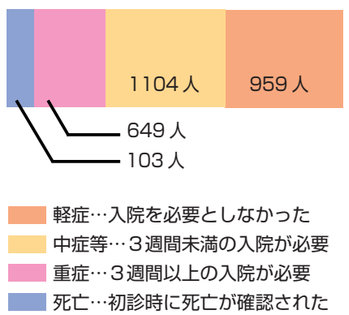
緊急を要する救急医療ですが、重症者よりも中症・軽症の搬送車が多い現状があります。昨年搬送された人の重症度を見ると、軽症が約34パーセントを占めています（表3参照）。そのため、命の危機にある重症者がいても、他の軽症者を搬送していて、すぐに出動できない事例も発生しています。「指を少し切った」など明らかに軽症だと分かる場合は、自分で病院に行けないかよく考えて、行動してください。

正しく救急車を利用する

しかし、一般の人が重症か軽症かを判断するのは難しいことです。救急車を呼ぶべき状態の人が、「消防署の人に悪いから」と言って深刻な状態に陥ってしまうケースもあります。命に関わる問題ですので、判断できないときは救急車を呼ぶことが大切です。

また、119番通報に悪質な「いたずら電話」をかけてくる人もいます。救急の現場では、1秒で命が救えるかどうかが決まることもあります。いたずら電話は絶対にしないでください。

表3）傷病程度別救急搬送人数



救急搬送の設備

市立病院にあるヘリポートに着陸するドクターヘリ。平成25年西諸地域では、56件の搬送がありました

救急車内の様子。患者を観察、処置、搬送する資機材が数多く積載されています

進化する消防本部

1秒でも早い現場到着 最新指令システムで実現

西諸広域行政事務組合消防本部では、平成23年3月に最新の指令システムを導入しました。これにより、119番通報受けた時点で、GPSなどにより通報先の位置を特定できるようになりました。また、救急車両とメールのやり取りもでき、従来5分以上かかっていた出動までの時間が3分に短縮しました

私たちにできること

限りある救急医療を皆で守る

病院や医師、消防署職員、救急車など救急医療には限りがあります。しかし、救急医療の患者の数は、今も増加し続けておりこのままでは維持できない可能性があることは否定できません。

この問題を解決するためには、ひとりひとりが当事者意識を持つことが必要です。まずは、自分が患者にならないよう日ごろから健康に気を配る。そして、体調が悪いと感じたときは日中早めに診察を受ける。また、かかりつけ医を持つことも大切です。

もし近くの人が突発的な急病になってしまったときは、冷静になり、心臓マッサージなどの応急処置を行うことで命をつなぐことができるかもしれません。

救える命を守るために。私たちが医療や病気について正しい知識を持ち、限りある救急医療を皆で守ることで、これからも維持し続けることができます。

9月13日に日本赤十字社の救急法講習があります。詳しくは23ページに掲載

INTERVIEW　救急医療について専門家・市民に話を聞きました

救える命を守るために大切なこと

小林市地域医療を考える会
会長
山下（やました）　浩司（こうじ）さん

日常から病気に興味を持ち正しい知識を身につける

小林は県内でも医師が少ない地域と聞いています。また、高齢化が進み医療需要が増大していくことは避けられません。その中で私たちにできることは、医療・病気について正しい知識を持つこと。例えば夜間に発熱したとき、すぐに診察を受けるべきか、様子を見ながら翌日病院に行くべきかを判断ができれば救急医療への負担は減らせます。非常に難しいことですが、興味を持って勉強し、理解を深めるよう日常から心がけてほしいです。私たちの会でも、医療や病気について情報発信し住民同士、また医師とのコミュニケーションが図られるよう努力しています。限りある医療をみんなで共有し、救急医療を維持できるまちづくりをしていきましょう。

市立病院
救急科医長
川井田（かわいだ）　望（のぞむ）さん

体調が悪いときは早めの診察健康的な生活で急病を防ぐ

救急医療は、常に情報がない中で多種多様な患者を治療します。そのため、「迅速に」、「的確に」、「見逃しのないように」の３点を心がけ、ここで見逃したら命を救えないと考え治療にあたります。しかし、小林には救急専門医や救急医療機関の数が少なく、他の分野の医師が当直で控えていることが実情。専門外の患者を診ることは、不安から大きなストレスがかかります。しかし、一人でも多くの命を救うために医師は協力して治療にあたっています。そこで皆さんにお願いです。日中であれば各専門医がいるので、体調が悪いと感じたら早めに診察を受けてください。また、かかりつけ医を持ち、健康な生活を心がけるなど、急病を防ぐ努力も必要です。

中央消防署　消防士長
救急救命士
徳永（とくなが）　洋幸（ひろゆき）さん

救急の現場は１分１秒が大切早い手当で救える命がある

救急の現場では、１分、１秒がとても大切です。私たちは、できる限り迅速に現場に到着できるよう努力しています。しかし、救急車が現場に到達するまでの時間は全国平均で約８分。救急の患者は、「動かしたり触ったりしない方がいい」と思われがちですが、私たちが現場に到着するまでの間に、皆さんに心臓マッサージや AED などの手当を行ってもらえると助かる可能性は格段に上がります。場合によっては、電話で心肺蘇生の口頭指導を行うこともありますので、落ち着いて協力していただけると助かります。また消防署では、救急法講習会などを事業所などの団体ごとの要請があれば、実施していますので、ぜひ活用してください。